

学位被授与者氏名	山田 恵
論文題目	妊産褥婦(母親)の「気になる」行動の理解と支援 —助産師に求められる安心感を届けるケア—
論文審査結果の要旨	<p>本研究は特定妊婦には該当しないが、助産師からみて「気になる行動」を示す産褥婦について、主要にはアタッチメントシステムとその機能不全に関する理論やモデルを手がかりにしながら分析しており、これまでの助産学の中ではあまり注目されてこなかった視点から「気になる妊産褥婦」の背景にある問題を捉え、そこから助産師の支援の課題を提起しており、助産学に新たな知見を提起した研究であると考えられる。</p> <p>特に、周産期がアタッチメントシステムが活性化してくる時期であることを踏まえて、そのタイミングを的確に捉えて「抱える環境」を提供する助産師の支援のあり方、またビフィリコラの開発したA S I (アタッチメント・スタイル・インタビュー)の知見も取り込んだ、アタッチメント対象につなぐ、アタッチメント対象を支えるアプローチの提起は、助産学の中では必ずしも明確に意識化されていなかったものでもあり、実践的にも価値のある知見の提起であると考えられる。</p> <p>その一方で、「気になる妊産褥婦」のアタッチメント・スタイルの分類については、あくまでも推測の域にとどまっていること、「非安心型のアタッチメントスタイル」と「未解決の葛藤」の関連などについてはさらなる検討が必要であろう。</p> <p>また、今回の事例が筆者が実践した事例ではなく、熟練助産師の聴き取りの事例であることもあり、「気になる妊産褥婦」の背景要因を推測する上での困難さがあったことは否定できない。たとえば、その背景に「未解決の葛藤」があると判断された事例については、その推測の根拠となるエピソードを果たしてそのように解釈できるのかについては、意見の分かれるところであろう。</p> <p>また、事例の経緯を見ていくと、助産師は身体的ケアによるホールディングが行なえる専門職であり、母親自身がまったく過去の自分の外傷体験や葛藤の言語化をしなくても、「抱える(holding)環境」の提供をすることで「気になる」産褥婦への適切な支援を展開できており、本研究で強調されている「未解決の葛藤」の言語化という支援が適切ではない場合も少なくないと考えられる。</p> <p>さらに言えば、助産師という専門職の仕事のなかで、臨床心理士の大河原(2019)らが実践しているような心理療法的なアプローチは現実には困難である場合が多いが、その場合にはどのような他職種との連携が求められるのかについても、今後のさらなる検討が必要であると考えられる。</p> <p>このような問題点や課題はあるものの、「気になる」妊産褥婦の問題をアタッチメント理論やそれに基づく仮説モデルから分析し、その理解と支援の課題を提起した先駆的な研究として、十分な価値を持つ論文であると判断される。</p> <p>2022年2月17日に、審査委員全員出席のもとで、B202教室にて最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。</p>

